

「トニー・ジャットと『ニューヨークレビュー・オヴ・ブックス』」

北海道大学 吉田 徹

トニー・ジャットは2005年に公刊された大著『ヨーロッパ戦後史（原題 Post War）』でその名を日米欧で知られるようになった。本人は2010年に帰らぬ人となったが、日本でも、同書の翻訳公刊を皮切りに、彼の著作の多くの翻訳をみている。実際、ジャットはフランス政治史・社会史の研究からそのキャリアをスタートさせ、その後徐々に精神史・文化史を取り込んでいった結果の集大成のひとつが『ヨーロッパ戦後史』であった。

もともと、盟友ティモシー・ガートン・アッシュが指摘したように、ジャットは彼自身が「卓越した思想家」と評したアロンと同じく「参加する観察者(spectateur engagé)」でもあった。1980年代後半に研究教育の場をアメリカ・ニューヨークに移してから、ジャットは「ニューヨーク知識人」の1人として、時代状況と精神史を巧みに絡めた多くの論説およびエッセーを『ニューヨークレビュー・オヴ・ブックス (NYRB)』、『ニューヨーク・タイムズ』や自ら編集委員を務めた『ニュー・リパブリック』などの左派系の雑誌・媒体に発表した。

彼が守備範囲とした領域は、知識人、欧州政治、高等教育、交通、文芸、カウンター・カルチャーなど幅広いが、中でもユダヤ系イギリス人として生まれ、シオニズム運動に参加した過去を持つ彼のイスラエルおよびイラク戦争に関する論説は、大きな反響を呼んだ。ジャットがパレスチナ国家建設を訴えて、2003年にNYRBに寄稿した論考「イスラエル：そのオルターナティヴ」は多くの賛否両論を巻き起こし、彼の「知識人」としての名声を高めると同時に、その後のアメリカ論壇（というものが存在するとして）でのメジャー・プレイヤーの1人となり、更なる積極的な言論活動を展開するきっかけとなった。

以上のように考えると、トニー・ジャットの知的キャリアは、イギリス・イスラエル・フランスでの経験をベースとした「大学人」の局面、『ヨーロッパ戦後史』執筆の直接的なきっかけを提供した中東欧での経験を経た後、情況発言とコミットメントへと傾注していった「知識人」としての局面との2つに分節することができるだろう。

そこで、本報告では、NYRB誌を中心とした論争を紹介した上で、ジャットの諸著作・論考、とりわけその自伝的回顧でもある『20世紀を考える (Thinking the Twentieth Century)』および『記憶の山荘 (The Memory Chalet)』を主たる手掛かりとして、晩年の彼の「知識人」としての変化がいかに成し遂げられていったのかを探ることとする。さらに、こうした情況発言と歴史・政治史という学問領域がジャットにおいてどのように通低しているのかについての考察を試みたい。